

子どもの絵本と社会 : Curious Georgeの文明観

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/4259>

出版情報 : 言語文化論究. 12, pp.29-34, 2000-08-31. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

子どもの絵本と社会

—Curious George の文明観—

谷口 秀子

1. 子どもの絵本

子どものための絵本¹⁾が、大人に読んでもらう必要のある低年齢の幼児を含む、子どもを主な読み手に想定しているのは言うまでもない。そのため、子どもの絵本においては、例えば小説などの大人のための文学に比べて、内容は平易で具体的であり、暗い現実よりはむしろ夢や理想が描かれ、リアリズムとはかけ離れた魔法や動物の擬人化などの手法が多く用いられている。

とは言うものの、子どもの絵本が大人の社会や既成の価値観から全く独立した聖域であるとは言いがたい。子どもの本は、原則として、子どもにとって面白くためになり、時には教訓にもなることを目指して作られる。そのため、本が書かれた時点において一般的に当然とされる価値観がその本に反映されるのはしかたのないことであろう。また、別の言い方をすれば、上位文化である大人の文化に対して、子どもや子どものための文化を下位文化（サブカルチャー）と考えれば、男性の文化に対する女性の文化をはじめとする他の下位文化同様、上位文化の価値観に同調するにしろ、反発するにしろ、無視するにしろ、それとは所詮無縁ではあり得ないのである。

2. Curious George の概要と魅力

小猿のジョージを主人公とする *Curious George*²⁾ は、H. A. Rey によって1941年にアメリカのボストンで出版された絵本である。この本はアメリカの子どもたちに長い間親しまれていることは言うまでもなく、日本でも、『ひとまねこごるときいろいぼうし』³⁾ という題名で翻訳本が出版されて以来、多くの版を重ね、長い間子どもたちに愛読されている。さらに、主人公の小猿のジョージは、子どもたちに絶大な人気があり、独特のタッチで描かれた小猿の絵は、大変有名なキャラクターとなっている。また、この *Curious George* に続いて、ジョージを主人公とする一連のシリーズの絵本が出版されており、こちらも *Curious George* に劣らぬ人気を博している。⁴⁾

Curious George は作品全体を通して、主人公のジョージに焦点を当てて物語が進められる。次作の *Curious George Takes a Job* 以降のシリーズ作品群が、アメリカを舞台としたジョージの愉快的な冒険を中心に扱っているのとは異なり、シリーズ第一作である *Curious George* においては、アフリカのジャングルで暮らしているジョージが人間に捕らえられ、アメリカの都市にある動物園に入れられるまでの顛末が描かれている。このため、第一作目の *Curious George* は、ジョージが好奇心から無邪気にいたずらをやって

のける楽しいエピソードに終始する第二作以降の作品とは、かなり性質を異にするのである。もちろん、*Curious George* においても、第二作以降と同様、小猿のジョージが、*Curious George* という名前の示すとおり、好奇心からいろいろなことをやってみようとして騒ぎを起こし、すんでのところまで危険を逃れるというような楽しいエピソードがあり、幼い読者をわくわくさせるのは言うまでもない。以下に、*Curious George* の概要を示す。

ジョージは、アフリカのジャングルで暮らしている好奇心が旺盛な小猿である。⁵⁾ ある日、ジョージは大きな黄色い麦藁帽子を被った人間の男性を見かける。男性はジョージのかわいらしさを見て、ぜひ連れて帰りたいと思う。男は、黄色い麦藁帽子を使ってジョージをおびき寄せる。ジョージは好奇心のあまり、その帽子に近づき、男性のまねをして帽子を被っているところを、男に捕まり袋に入れられる。黄色い帽子の男性は、袋に入れたジョージをボートに乗せ、自分の国に向かう大きな船に連れて行く。ジョージは悲しくなるが、それでも、ちょっとばかり好奇心がそそられる。("George was sad, but he was still a little curious." (p. 12))

船の中で、男性はジョージに大都市の動物園に連れて行ってやると言う。袋から出されたジョージは、男性に面倒を起こしてはいけない ("don't get into trouble." (p. 14)) と言われたにもかかわらず、ここでも好奇心を発揮し、甲板に出て、空を飛んでいるカモメのまねをして飛んでみようとして海に落ち、危ういところを船員に助け上げられる。

アメリカの大都市にある黄色い帽子の男性の家に着いた後も、男性が動物園に電話をかけるのを見て好奇心をくすぐられ、男の留守に電話をいたずらしてかけてみる。あいにく、ジョージが電話をかけた先はたまたま消防署であった。そのため、ジョージの電話は火事の通報と間違えられて、消防車が出動する大騒ぎとなり、ジョージは消防士にいたずらを咎められて牢屋に入れられる。ジョージは知恵を働かせて牢屋から脱出し、電話線を伝って逃げおおせる。自由の身になったジョージは、今度は街角の風船売りの風船に好奇心をくすぐられ、風船を取ろうとして、たくさんの風船とともに風に飛ばされてしまう。ジョージは随分高いところまで飛ばされた後、信号のてっぺんにどんと降りるが、それが原因で道路の交通が大混乱する。その時、黄色い帽子の男性が現れ、ジョージと男性は互いに再会を大喜びする。帽子の男性は風船の代金を払ってくれ、ジョージとともに車に乗って動物園に行く。動物園はジョージにとってすばらしい場所であることがわかる。⁶⁾ ("What a nice place for George to live!" (p. 54))

Curious George に始まる一連のシリーズが多く読者を夢中にさせる理由は、ジョージの無邪気さと子どもらしい好奇心にもとづく行動力の魅力であり、それが子どもだけではなく、以前は子どもであった大人の読者にも、自分をジョージに重ね合わせ、どきどきわくわくしながらジョージの活躍を追うのを容易にしているのである。このようなヒーローとしてのジョージの魅力は、次の解説に端的に表れている。

I have read *Curious George* hundreds of times. Why?

Because I identify with this little creature. When I read *Curious George's*

adventures aloud, not only is the child in my lap identifying with George, so am I. I, too, am curious. I, too, get into all kinds of trouble because of my curiosity. And when I'm reading about George, I have the tingly but comfortable feeling that everything is going to come out all right in the end; there is going to be a happy ending. George's adventures are going to get him into trouble, but his very curiosity has something to do with the "all rightness" of the ending.

... George's curiosity would have caused some kind of adventure that would have made everything work out for the best in the end, because George's curiosity is always healthy and never mean. George, like most true heroes, is a creature of action; he acts, rather than being acted upon.⁷⁾

また、日本語版の『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』に付された解説にも、大人の目を通してのジョージの魅力が以下のように語られている。

子どもらしい好奇心にあふれて何でもすぐに真似してみる、失敗しても懲りずに又繰り返すのは幼児期の子どもの姿そのもので、うちの子にそっくりとうなずかされます。こわいもの知らずの冒険心で、できそうにもないむずかしい事やっけてのけるところは、子どものあこがれでもあります。子どもはみなジョージのように、明るく生き生きとした子に育って欲しいものです。⁸⁾

3. Curious George の文明観

ジョージの「自分もやってみたい」という好奇心は、ジョージの魅力の源であるとともに、ジョージをいろいろな面倒に巻き込むことになる。まず、冒頭でジョージの好奇心の旺盛な様子が、“This is George. He lived in Africa. He was a good little monkey and always very curious.” (p. 4) と紹介される。また、ジョージが、ジャングルで見つけた黄色い帽子を被ろうとしたり、船の上でカモメのまねをして飛んでみようとしたり、男性の家で電話をかけてみたり、街角の風船売りの風船を取ろうとしたりして、その結果、いずれも面倒を引き起こす時には、必ず、ジョージが好奇心に駆られている様子が、その都度、“He was curious.”⁹⁾ というような表現で強調されるのである。

ジョージは、アフリカのジャングルで黄色い帽子を見つけた時、その帽子を被ってみたいという強い好奇心に駆られるが、そのことが、ジョージをアフリカのジャングルから遠く離れたアメリカに連れて行くことになる。さらに、ジョージが黄色い帽子の男性にさらわれて、ボートに乗せられた時には、“George was sad” (p. 12) というようにジョージの悲しい気持ちには言及されるものの、その直後に、“but he was still a little curious.” (p. 12) と続けられることによって、ジョージの感じる悲しみよりも好奇心の方が強く印象づけられるような書き方になっている。この場合、黄色い帽子の男性の行為に対する批判は一切行われないうところか、ジョージがこの状況においても好奇心を持っていることが、男がジョージをアメリカに連れて行くことを合理化し、正当化する装置にすらなっていると言えよう。すなわち、“What a nice little monkey.” “I would like

to take him home with me.”(p. 6) という黄色い帽子の男性のひとりよがりの感情のために、住み慣れたジャングルから有無を言わずに袋に入れられて連れ出され、ただ一匹、環境の全く違うアメリカの大都市に連れて行かれる際にジョージが感じるはずの悲しみや不安が、その後の愉快的な冒険のエピソードのきっかけとなるジョージの好奇心の強さに対する言及と描写によって覆い隠されているのである。

このように、ジョージが、黄色い帽子の男性に自分の意に反してジャングルから連れ去られていることの不当性は、読者に認識されにくくなっており、場合によっては、読者から肯定的な評価すら導き出しかねない恐れがある。この背景には、ジョージがジャングルから連れて行かれるということは、その時点では大変な悲劇のように見えるが、結果として先進国であるアメリカの大都会の素敵な動物園に入るという幸せを味わうことになるのだという言説があるように思われる。事実、帽子の男は、船上でジョージを袋から出した後、“George, I am going to take you to a big Zoo in a big city. You will like it there.”(p. 14) と述べる。この考え方は、まぎれもなく、野生の小猿にとってすら生まれ育ったアフリカのジャングルよりも、アメリカの動物園の方が良いという価値観に裏付けられている。また、この価値観は、帽子の男性がジョージを動物園に連れて行った時に、“What a nice place for George to live!”(p. 55) という言葉でこの物語が終わり、そこに、動物園の中で風船を手に満面の笑みをうかべているジョージの挿し絵があることによって、さらに補強されるのである。

上に述べたような価値観は、*Curious George* に固有のものではなく、この作品が生み出された時代の一般的な社会通念に過ぎない。すなわち、ここには、ジャングルと都市によって象徴される、未開の自然と文明に対する20世紀前半までの一般的な価値観が反映されており、未開に対する文明の絶対的な優越という概念への手放しの信奉が表れているのである。野生の動物をジャングルから連れ出し、大都市にある人工的な動物園に閉じ込めることが、その動物にとって“nice”であると考えた発想は、ジョージが擬人化されており、人間の子どもに模されてもいるということも斟酌しても、第二次世界大戦以前の帝国主義的な文明観の影響を受けていると言わざるを得ない。20世紀の始めに、ポーランド出身のイギリス人作家 Joseph Conrad は、帝国主義時代の植民地での実体験を踏まえてコンゴを舞台に描いた *Heart of Darkness* (『闇の奥』) の中で、(西欧) 文明は非文明に勝るといふ、当時主に欧米の社会で一般に信じられていた帝国主義的な文明観に対して、人間性の中に潜む悪に対する文明の無力さなどを訴え、人間性や倫理の側面から異議を唱えたが、このような考えが、広く一般的に社会の中で認識されるのは、第二次世界大戦以後のことである。

4. 子どもの絵本と社会

現代都市社会の効率重視、機械中心の有様が人間性や人間同士のコミュニケーションに与える弊害が広く認識されるようになった今日、一般論としては、*Curious George* の根底にも流れていると思われる、上に述べたような、1941年当時の文明観に無条件に共感して、野生の小猿をジャングルからさらって都市に連れてくるのが、小猿にとって幸せなことであるとする者は極めて少数であろう。しかしながら、*Curious George* を読

む場合、その中に含まれる前時代的な価値観に対する心地悪さは、ジョージの無邪気なかわいらしさと彼の好奇心と行動力と冒険とハッピーエンドの結末という物語の魅力といつもにこにこ楽しそうに笑っているジョージの愛らしい挿し絵の陰に隠れて、読者に強く意識されることは少ないと思われる。

Curious George とは異なり、1899年にイギリスで出版された *The Story of Little Black Sambo* (『ちびくろサンボ』) は、作品に反映されている出版当時の社会の価値観が、はっきりと読者に認識される絵本の例である。長い間読み継がれてきたこの本は、1970年代になって、時代の変化とともにその中に含まれている黒人観に対する評価が変わったのを受けて、黒人に対して差別的な本だとして、見直しの必要を訴えられることとなった。白人の作者によって書かれたこの絵本は、内容的には主人公サンボの機知に富んだ行為を描いたものであり、黒人のサンボを人種的に差別する明確な意図を持って書かれたわけではないが、黒人の身体的特徴を強調した絵とサンボという黒人に対する蔑称を使用していることなど、黒人を差別的にステレオタイプ化して描いているという理由により、後世の批判を強く浴びたのである。¹⁰⁾ この絵本の文学的価値や、この本がイギリスではなく日本で一時絶版にまで追い込まれたことの是非は別として、この場合のように、作者の意図を越えたところに、本が作られた時代とは切り離せない、執筆及び出版当時の社会の価値観や社会通念が、子どもの絵本の中にも存在していることは否定の余地がないであろう。

子どものための文学は、子どもに夢を与え、時には教訓や指針を与えることを目指していることが多いため、純粋無垢、不偏不党であるという印象を与えがちである。しかしながら、この *Curious George* や *The Story of Little Black Sambo* に見られるように、子どもの本と言えども、その作品が執筆された時代の中心的な価値観から無縁ではあり得ず、常に、時代の制約を受けているのである。時代とともに変化し見直される価値観があるように、絵本の中にも、後世の価値観から見れば違和感を覚えるようなものが存在し得るのが事実である。もちろん、このことによって、作品の文学的な価値が著しく減じるものではない。しかしながら、このような作品を子どもに与える場合、主人公の魅力や話の筋のおもしろさのみに目を奪われて、その背後にある見直されるべき古い価値観による言説の存在を見逃してはならないであろう。¹¹⁾

註

1. 小論では、昔話やおとぎ話の絵本ではなく、子どものために作られた創作童話の絵本について述べる。
2. H. A. Rey, *Curious George in The Complete Adventures of Curious George* (Houghton Mifflin Company, 1994). 小論におけるこの作品からの引用はすべてこの版により、本文中にページ数のみを記す。
3. 光吉夏弥 (訳) 『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』 (岩波書店、1983).
4. *Curious George* の続編には以下のものがある。
Curious George Takes a Job (1947), *Curious George Rides a Bike* (1952), *Curious George Gets a Medal* (1957), *Curious George Flies a Kite* (1958), *Curious George*

Learns the Alphabet (1963), *Curious George Goes to the Hospital* (1966)

上記の作品のうち、*Curious George Flies a Kite* と *Curious George Goes to the Hospital* は、妻の Margret E. Rey との合作である。

5. “This is George. He lived in Africa. He was a good little monkey and always very curious.” (p. 4) という作品の冒頭は、日本語版の『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』では、「これは、さるのじょーじです。じょーじは、あふりにかすんでいました。まいにちたのしくらしていましたが、ただこまったことに、とてもしりたがりやで、ひとまねがだいすきでした。」 (p. 4) と翻訳されている。好奇心（「しりたがり」であること）は、ジョージをいろいろな問題に直面させるが、ジョージの好奇心は、原作では決してマイナスのものとはばかりには捉えられていない。問題が起こる前から、いきなり冒頭で、好奇心を「こまったこと」と捉えるのは、日本の文化の特徴的な考え方の表れであるのかも知れない。
6. *Curious George* は、見開きで、左のページに文章が、右のページに挿し絵が配置されている。この最後の場面の挿し絵において、ジョージは動物園の中で満面の笑みをたたえている。
7. Madeleine L'Engle, 'Introduction to *The Complete Adventures of Curious George*,' pp. vii-viii.
8. 藤田よし子「『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』読みきかせの前に」(2000年度「こひつじ文庫」別紙)。
9. 正確には、帽子の場面では、“of course, George was curious.” (p. 6)、カモメの場面では、“He was very curious.” (p. 16)、電話の場面では、“George was curious.” (p. 30)、風船の場面では、“He was curious again.” (p. 44) という表現が用いられている。
10. *The Story of Little Black Sambo* をはじめとする Helen Bannerman の作品に対して、1972年にイギリスの「人種差別に反対する教師の会」(Teachers Against Racism) が行った抗議は以下のようなものである。

In all these books the underlying racist message is made all the more sinister by their appearance of innocence and charm. . . The reader swallows wholesale a totally patronizing attitude towards black people who are shown as greedy (Black Sambo eats 169 pancakes), stereotyped happy, clownish, irresponsible plantation 'niggers.' (Humphrey Carpenter and Mari Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford University Press, 1984), p. 314.)

イギリスでは、この抗議を受けた後も、多くの支持者を得て、*The Story of Little Black Sambo* は出版され続けている。

11. さらに言えば、現在の価値観とは異なる価値観を含んだ本を幼い子どもに与える場合、読み手である大人が適切なコメントを加える必要があると思われる。